

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月16日現在

機関番号：14501

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22320008

研究課題名（和文） メレオロジーとオントロジー——歴史的分析と現代的探究

研究課題名（英文） Mereology and Ontology—Historical Analysis and Contemporary Investigations

研究代表者

松田 毅 (MATSUDA TSUYOSHI)

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：70222304

研究成果の概要（和文）：

我が国の哲学会においてはいぜん十分には認知されていない「メレオロジーとオントロジー」の主題群に関して、古代から現代を貫く概念と問題の連関・発展についての見通しを得た。また、「部分と全体」の問題と関わりの深い哲学者たちに焦点を定めた、これまで未開拓であった哲学史的分析とそれを基盤にした諸問題に関する現代的探究により、特に生命や心の存在論的探求への「部分と全体」の観点からのアプローチの有効性と可能性とが示された。

研究成果の概要（英文）：

A view to the development and its logical structure of the relatively still unknown theme in Japan, that is “Mereology and Ontology” in the western philosophy from the start to modern age is shown by this research. Thereby we can verify the efficiency and rich possibilities of this research program of “The Whole and its Parts” especially in terms of the problematic of life and mind from the historical and analytical viewpoints.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2012年度	1,500,000	450,000	1,950,000
総計	5,100,000	1,530,000	6,630,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学 哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学、存在論、オントロジー、メレオロジー

1. 研究開始当初の背景

(1) 「メレオロジーとオントロジー」の主題に関しては我が国においても、近年、いわゆる分析的形而上学の分野を中心に研究書や学会誌の特集等が公刊されてきている。

(2) しかし、存在論の歴史の中で「メレオロジー」と関わりの深いアリストテレス、トマス・アクィナス、ライプニッツ、フッサール等に焦点を定めた、哲学史的分析とその現代的探究はまだほとんど行われていない。

(3) メレオロジーが伝統的存在論、知識の哲学、心の哲学、言語哲学などの諸主題にどのような関わりをもつか、も必ずしも十分には解明されていなかった。

2. 研究の目的

近年の「形而上学」の復活や情報工学分野の「オントロジー」の発展により、「存在論」とは何か、その現代的意義と可能性が問われている。

(1) 研究の目的は、古代哲学から現代哲学までの研究者に論理学にも精通する研究者を加えたチームが、「メレオロジーとオントロジー」の諸課題に共同して取り組み、その可能性をあらためて解明することにある。

(2) なお未開拓の分野である「メレオロジー」—「部分・全体」の論理・存在論的探究—の哲学史解明を行う。

(3) 同時にその豊かな哲学的可能性を、応用と技術的側面も踏まえ、存在論、知識の哲学、心の哲学、論理学、言語哲学の各問題群に即して順次、総合的に明らかにしていく。

3. 研究の方法

以下の3象限を設定し、研究分担者が定期的に「メレオロジーとオントロジーワークショップ」(MOW)の場で共同討議を行い、意見交換し考察を深める。MOWは内外の研究者の招聘も行い、大学院生・若手研究者も参加できる形を取り、進展に応じ、問題設定を年度ごとに見直し、課題を討議する。

[1] フォーマル・オントロジーの概念史的解明—質料形相の存在論の再検討

[2] メレオロジーとオントロジーの応用研究—「心の哲学」と「言語哲学」

[3] メレオロジーの問題論的考察—「部分・全体」の論理学・存在論・知識の哲学

4. 研究成果

まず、全体の成果について述べ、その後で、本研究の性格上、古代から時代順に新しいところに向かってその成果を記していく。

(1) 全体として、上記の方法により、研究対象とする時代と分野とを異にする研究者が、共通の視座から各自の問題を考察し、意見交換することで、「メレオロジーとオントロジー」の主題に関する歴史的連続性と現代哲学の切断面とを確認することができた。

この点は、MOWの場でも確認されたが、特に有志が共同発表した第45回科学哲学会大会ワークショップ(2012年11月宮崎大学)の「生命と心のメレオロジー：歴史と現在」では、とりわけ生命の問題について、アリストテレス、ライプニッツ、ヴァン・インワールゲン、アレグザンダーに即して示された。

今後は、この論点をさらに究明することがひとつの課題である。これは、近代科学の基礎にあった原子論や機械論が、何らかの物理的な基礎的存在者を部分とし、この部分から合成される全体として「生命と心」を特徴づ

けようとしてきた点に関わる。

伝統形而上学のなかには、部分全体関係の多様な構造上の違いを浮き彫りにすることを通じて、「生命と心」に独自の身分を与えるものがあり、現代形而上学の論者にもその立場を支持するものがある点が注目される。

(2) 茶谷はギリシア哲学、特にアリストテレス哲学のメレオロジカルな考察を担当し、その成果を論文・学会発表した。

『デ・アニマ』の魂部分論と倫理学の魂部分論の比較考察の結果、アリストテレス倫理学に関し、魂の部分論が倫理学の魂部分を原理的に基礎づけることを示し、倫理学の自律性を強調する解釈を批判した。

また、アリストテレス魂論の心身関係論について質料形相論的心身論(魂を形相、身体を質料、有機体を質料と形相の結合実体とする見方)をめぐる諸説を比較検討した。チャールズが提唱する心物相即説(心的事象を、形相質料の両面を不可分離的に有する存在とする解釈)を評価する一方、この説も一つの見方にとどまることを示した。

以上を踏まえ、アリストテレスの質料形相論を「部分全体」の観点から概観・考察した。ここから質料形相論を捉えるなら(i)部分(質料・形相)と全体(結合実体)の不可分離性を意味する「非二元論」と、(ii)結合実体が質料形相に分節される基礎的事実に注目し、部分による全体の説明力を認める「非一元論」の二特徴が考えられる知見を提示した。そして、両者が緊張関係にあること、また、心身論の場合も二つの方向性は解釈の争点であると同時に、アリストテレス自身の内に併存している点を示した。

(3) 加藤は、中世哲学、特にアキナスなどに関するメレオロジカルな考察を担当し、その成果を論文・学会発表した。

これまで中世哲学研究ではメレオロジーないし「部分全体」関係への関心は、それを使って説明される諸問題(質料的事物の本性、普遍と個体、魂の本質と能力などの自然哲学、論理学、形而上学の主要問題)への関心ほど高くなかったが、まず、その中世的理解の源をアリストテレス『形而上学第V巻』、ボエティウス『区分論』などに遡り明らかにした。

アリストテレス『形而上学』に関するアキナスの注解から「部分全体」関係の理解、言わば「中世メレオロジー」の一断面として、三つの「部分全体」関係、つまり「普遍的全体」(totum universale)、「統合的全体」(totum integrale)、「能力的全体」(totum potentiale)、および各々の部分を取り出した。

このうち(人間の)魂は、能力的全体の典型として形而上学的に独特な地位を占める

ことを示した。つまり、それが普遍でなく、個体として普遍的全体(類や種)と異なる点。魂は、統合的全体(個的自然物や人工物)のように、個的諸部分に分割されないが、何らかの仕方で諸能力に区分される点。人間の魂は、身体のような場所に様々な能力(生命や感覚や知性)として現れ、かつ魂は、それら諸能力のどれひとつでもなく、それらすべての集合体であること。各能力は全体としての魂の現われのひとつにすぎず、それぞれ独自の力と機能を発揮しながら、全体としての魂を構成する部分である点。アキナスが以上のような魂を「能力的全体」とみなし、普遍的全体と統合的全体の間位置づけることも解明した。

さらに加藤はアキナスの著作の中に散在する「xはyの部分である」という関係を少なくとも21種類に分類した。今後は、それを踏まえて、アキナスのメレオロジーとオントロジーとの関係を考察することが課題となる。

(4)松田は、ライプニッツのメレオロジーに関する論理と形而上学の包括的な研究を行い、内外でその成果を論文あるいは学会発表した。

特に、ライプニッツによる「連続体合成の迷宮」の問題解決に関連する、物体、数学的存在そしてモナドの存在論的差異が部分全体関係の観点から説明されている点に注目し、それを現代のメレオロジーの観点から検討、解明した。

また、同時にこの視点を現代哲学に広げた。ものの持続的同一性の問題に踏み込み、合成の問題を扱う、ヴァン・インワグエンの『物質的存在』を取り上げた。その結果、現在、影響力の強いD・ルイスの「ヒュームの付随性」に対する存在論的アンチテーゼが、生命の部分全体問題から十分検討の余地のあるものとして浮上する点を示した。

さらに、フッサールの存在論の研究を行い、論文発表した。特に初期の『論理学研究』から最晩年の間主観性の問題群まで、一貫して見られる、相互内在と相互外在の対比あるいは「契機」と「断片」の存在論的構造の特徴づけに注目し、それをメレオロジーの観点から検討、解明した。ここで示された契機に固有の部分全体関係の構造の解明が今後の課題となる。

(5)長坂は、デザインについての実証的な研究と、クリストファー・アレグザンダーのデザイン理論に関する研究を行うとともに、デザイン行為を科学的な立場で検討するグループの中でデザイン行為を数学的な道具を用いて表現する理論(一般設計学、アレグザンダーのデザイン理論、オントロジー工学

等)についての検討を行った。これらの成果は論文・学会発表された。

これらの研究に基づき、デザイン行為を分析する上で不可欠な「機能概念」に関して主に哲学者が中心となって進めている生物の機能の定式化と、工学研究者が進めている人工物の機能の定式化の間に超えがたいギャップがあることを指摘した。また、「行為者」としての工学者は、デザイン行為をする上で人工物が存在しない時点で機能について考えなければならないため、目指す場所としての人工物の意図・目的が必要となるのに対して、哲学者が「観察者」としての生物の機能概念から意図・目的概念を排除しようとしてきたことを指摘し、機能の定式化に見られるギャップはこの立場の違いを反映しているものであると分析した。

(6)中山は、内外の学会、論文発表、著書の公刊を通して、メレオロジーの応用を中心にした研究を展開した。特に、これに関連して、韓国、中国での講演などによりアジアの哲学領域の研究者たちの意見交換を積極的に行った。多元的言語論と四次元メレオロジーの関係についての再検討を行い、この二つの観点の関係に関する研究を行った。特に、多元的言語論の可能性をより広い観点から追究し、国内外の学術会議で発表を行うとともに、その成果の一部を研究論文としてまとめた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計23件)

①長坂一郎「クリストファー・アレグザンダーの後期理論の思想的背景-ホワイトヘッドのコスモロジーと「神」日本建築学会計画系論文集686号2013年pp.925-933査読有(掲載決定)

②松田毅「フッサールのメレオロジーに関する試論-相互外在と相互内在-」『神戸大学文学部紀要』40号2013年pp.1-31査読無

③松田毅「ライプニッツはスピノザと出会う前からライプニッツだったのか」『ライプニッツ研究』2号2012年pp.89-107査読有

④MATSUDA, T. The Meaning of Kant's Transformation of Leibnizian "Principle of Reason" from a contemporary Leibnizian point of view, 『愛知』神戸大学哲学懇話会24号2012年pp.25-48査読無

⑤Nakayama, Y. Four-Dimensional Mereology and Agents in the Universe, *First Conference on Contemporary Philosophy*

in East Asia, Conference Booklet, 2012年 pp. 80-81 査読有

⑥中山康雄「〈数学の哲学〉における多元的視点」『科学基礎論研究』39巻2号2012年 pp. 21-31 査読有

⑦加藤雅人「全体と部分：アキナス、中世メレオロジー」『中世哲学研究』京大中世哲学研究会31号2012年 pp. 19-48 査読無

⑧加藤雅人「アキナスとメレオロジー」『哲学』関西大学哲学会30号2012年 pp. 1-24 査読無

⑨茶谷直人「アリストテレス心身論における心物相即説 (psycho-physical interpretation) をめぐって」『神戸大学文学部紀要』39号2012年 pp. 1-17 査読無

⑩MATSUDA, T. A Leibnizian Mereological Consideration About Geometrical Beings, Bodies and Monads, IX. *Internationaler Leibniz-Kongress. Natur und Subjekt* 2011年 pp. 652-659 査読無

⑪松田毅「ライプニッツはスピノザをどう読んだか—『神学・政治論』・「自然主義」・ライプニッツ—」『スピノザ研究』11号2011年 pp. 65-86 査読無

⑫MATSUDA, T. Evils as parts of the history towards a Leibnizian mereological consideration, 『愛知』神戸大学哲学懇話会23号2011年 pp. 22-37 査読無

⑬Nakayama, Y. Scientific Progresses Increase of Expressibility, Accuracy and Coherence, *14th Congress of Logic Methodology and Philosophy of Science: Extended Abstracts, Nancy 2011*, CD-ROM版3ページ 査読有

⑭中山康雄「ロボット工学研究に現れる哲学の問題—相互認知環境としての文脈と自己の位置付け」『科学哲学』44巻2号2011年 pp. 1-16 査読無

⑮加藤雅人「全体と部分—中世メレオロジー序論」『哲学』関西大学哲学会29号2011年 pp. 1-16 査読無

⑯茶谷直人「『エウテュロン』におけるエウテュロン」『愛知』(神戸大学哲学懇話会編)23号2011年 pp. 38-53 査読無

⑰茶谷直人「アリストテレスの魂部分論についての一つの視点—『デ・アニマ』と『ニコマコス倫理学』」『神戸大学文学部紀要』38号2011年 pp. 1-16 査読無

⑱MATSUDA, T. Leibniz on Causation: From his definition of cause as 'coinferens', *Studia Leibnitiana Sonderheft*, 37, 2010年 pp. 101-110 査読有

⑲松田毅「ライプニッツ原因概念の現代的意義—D. ルイスの分析を手がかりに」『ライプニッツ研究』1号2010年 pp. 115-134 査読有

⑳中山康雄・福田 佑二「アフォーダンス系の創発と遷移に関する哲学的考察」日本認知

科学会第27回大会発表論文集 (CD版) 2010年 pp. 605-614 査読有

㉑中山康雄「ロボット工学に関する哲学的考察」第28回日本ロボット学会学術講演会発表論文集 (CD版) 2010年4ページ 査読無

㉒長坂一郎「クリストファー・アレグザンダーの初期理論における思想的背景(その1): パタン・ランゲージの理論的基盤: 数学的構造主義とヒルベルトの形式主義」日本建築学会計画系論文集647号2010年 pp. 235-243 査読有

㉓長坂一郎「クリストファー・アレグザンダーの初期理論における思想的背景(その2): パタン・ランゲージの理論的基盤: 数学的構造主義とヒルベルトの形式主義」日本建築学会計画系論文集658号2010年 pp. 2989-2997 査読有

[学会発表] (計35件)

①中山康雄「規範体系論理学を基盤にした言語行為の分析」第29回日本認知科学会大会2012年12月13日 仙台国際センター

②MATSUDA, T. A Leibnizian Ontological Consideration about Geometrical Beings, Bodies and Monads, From a Mereological point of view, *Workshop of Early Modern Philosophy* 2012年11月28日 University of South Florida (USA)

③Nakayama, Y. Reality and Fiction in a Technological World, 第二回東アジア科学哲学ワークショップ2012年11月12日 宮崎駅前KITEN ビル8階コンベンションホール

④松田毅「身体のメレオロジー: ライプニッツとインワーゲン」第45回科学哲学学会ワークショップ2012年11月11日 宮崎大学

⑤中山康雄「四次元主義の立場からのコメント」第45回科学哲学学会ワークショップ2012年11月11日 宮崎大学

⑥長坂一郎「生物と人工物の機能: 振る舞いと意図と価値」第45回科学哲学学会ワークショップ2012年11月11日 宮崎大学

⑦茶谷直人「アリストテレス哲学における〈部分〉と〈全体〉——質料形相論(hylomorphism)としてのメレオロジー——」第45回科学哲学学会ワークショップ2012年11月11日 宮崎大学

⑧中山康雄「四次元主義と主張文脈」第45回日本科学哲学学会大会2012年11月10日 宮崎大学

⑨松田毅「「ものの持続的同一性」に関するライプニッツの形而上学的考察の検討——「実体形相」とテセウスの船の譬え——」第4回ライプニッツ協会大会2012年11月3日 東京女子大学

⑩Chatani, N. Aristotle and the Unity of Bio-Medical Ethics, 0The 6th Inter-

national Conference on Applied Ethics,
2012年10月27日北海道大学

⑪茶谷直人「アリストテレスにおける愛の帰一性」日本倫理学会第63回大会2012年10月13日日本女子大学

⑫Nakayama, Y. Four-Dimensional Mereology and Agents in the Universe, First Conference on Contemporary Philosophy in East Asia 2012年9月7日Academia Sinica (Taipei, Taiwan)

⑬Nagasaka, I. Visual Analysis of Human Behavior Based on Vector Field and Landscape Diagram, 2012 Design Research Society (DRS) international conference, 2012年7月1日Bangkok (タイ)

⑭中山康雄「規範体系論理学の特徴づけ」科学基礎論学会2012年6月17日首都大学東京 (南大沢キャンパス)

⑮中山康雄「規範体系論理学の諸特性」LENL S冬期研究会「動的論理と言語」2012年1月21日城崎大会議館

⑯長坂一郎「3次元ランドスケープ表現による人の行動傾向の視覚的分析」第34回情報・システム・利用・技術シンポジウム2011年12月15日建築会館ホール

⑰松田毅「テセウスの船あるいはティブルス—ライブニッツの場合」第3回MOW「メレオロジーとオントロジーワークショップ」2011年12月23日神戸大学人文学研究科

⑱長坂一郎「工学的なオントロジー概念とメレオロジー理論:クリストファー・アレグザンダーを題材にして」第3回MOW「メレオロジーとオントロジー」ワークショップ2011年12月23日神戸大学人文学研究科

⑲茶谷直人「アリストテレスにおける魂の部分論について」第3回MOW「メレオロジーとオントロジー」ワークショップ2010年12月23日神戸大学人文学研究科

⑳中山康雄「示すことの哲学的分析」第44回日本科学哲学会大会2011年11月19日日本大学文理学部

㉑松田毅「フッサールのメレオロジーに関する試論—相互外在と相互内在—」日本現象学会第33回研究大会2011年11月5日立命館大学

㉒長坂一郎「ランドスケープ・ダイアグラムを用いたユーザ行為の多様性と空間特性の分析」第22回設計工学・システム部門講演会2011年10月21日山形大学

㉓MATSUDA, T. A Leibnizian Mereological Consideration About Geometrical Beings, Bodies and Monads, IX. *Internationaler Leibniz-Kongress*. 2011年9月29日ハノーヴァー大学 (ドイツ)

㉔中山康雄「多元的言語論を基盤にした科学哲学の構想」応用哲学会臨時大会2011年9月23日京都大学

㉕Nakayama, Y. Scientific Progress as Increase of Expressibility, Accuracy and Coherence, *14th Congress of Logic Methodology and Philosophy of Science* 2011年7月21日Nancy University (フランス)

㉖加藤雅人「アクィナス:部分と全体」第5回MOW「メレオロジーとオントロジー」ワークショップ2011年3月10日神戸大学人文学研究科

㉗長坂一郎「定式化:デザインと論理」シンポジウム「建築のデザイン科学の方法論」2011年3月8日建築会館

㉘松田毅「ライブニッツはスピノザと出会う前からライブニッツだったのか」シンポジウム:ライブニッツとスピノザ、2011年3月6日大阪大学文学部

㉙長坂一郎「クリストファー・アレグザンダーの認知科学研究とデザイン理論」(招待講演)日本認知科学会「デザイン・構成・創造」研究分科会研究会2011年1月28日建築会館

㉚中山康雄「ロボット工学研究に現れる哲学の問題」日本科学哲学会第43回大会シンポジウム2010年11月28日大阪市立大学

㉛松田毅「ライブニッツのメレオロジー序論—多元論か一元論か」第2回ライブニッツ協会大会2010年11月14日学習院大学

㉜長坂一郎「アレグザンダーの初期理論における数学的構造主義とヒルベルトの形式主義の役割」日本建築学会学術講演会2010年8月24日富山大学

㉝ Nakayama, Y. Igashira, M. Koyama, T. Existence of an operator of a teleoperated android during a conversation, *7th International Conference on Cognitive Science*, 2010年8月17日China National Convention Center (Beijin, China)

㉞中山康雄「ゲーム体系による社会組織の分析」科学基礎論学会2010年6月13日専修大学

㉟中山康雄「ゲーム体系の科学技術論への適用」応用哲学会2010年4月24日北海道大学

〔図書〕(計8件)

①松田毅『デカルトをめぐる論戦』「ライブニッツとデカルト—科学の形而上学的基础づけと無限小をめぐる—」京都大学学術出版会、安孫子信・出口康夫・松田克進編2013年 pp. 72-92

②松田毅『ライブニッツ読本』「現代形而上学とライブニッツ」法政大学出版局、酒井潔・佐々木能章編2012年 pp. 323-334

③中山康雄『示される自己—自己概念の哲学的分析』春秋社2012年242ページ

④中山康雄「現場から出発する哲学」戸田山和久・美濃正・出口康夫(編)『これが応用哲学だ!』大隅書店2012年 pp. 114-121

- ⑤長坂一郎(共著 日本建築学会編)『建築のデザイン科学』(第4章2節・4節担当) 京都大学出版会2012年pp. 176-181, pp. 186-204
- ⑥中山康雄『規範とゲーム社会の哲学入門』勁草書房2011年276ページ
- ⑦中山康雄「形而上学から科学技術論へ」戸田山和久・出口康夫(編)『応用哲学を学ぶ人のために』世界思想社2011年 pp. 60-70
- ⑧中山康雄『科学哲学 ブックガイドシリーズ 基本の30冊』人文書院2010年200ページ中181ページ

なお、上記のMOWは計6回研究会を開催した(第6回は台風による悪天候で中止、場所はすべて神戸大学人文学研究科)。

第1回(2010年11月6日)齋藤暢人(早稲田大学)「時区間の論理とメレオロジー」、
「現代の普遍論争とアリストテレス」

第2回(2011年11月16日)Herbert Breger(Hanover ライプニッツ文書室長)“The role of mathematics in Leibniz’s philosophy”

第3回(2011年12月23日)茶谷直人「アリストテレスにおける魂の部分論について」、松田毅「テセウスの船あるいはティブルスーライプニッツの場合」、長坂一郎「工学的なオントロジー概念とメレオロジー理論:クリストファー・アレグザンダーを題材にして」

第4回(2012年2月14日)Javier Kasahara教授(チリ・Catholic大学)“The Continuum in Leibniz as a Methodological Approach to his Metaphysics”

第5回(2012年3月10日)加藤雅人「トマス・アクィナスの「全体と部分」」、池田真治(パリ・ソルボンヌ大学)「ライプニッツにおける境界の概念」、中山康雄「四次元メレオロジーと多元的言語論」

第6回(2012年9月30日中止)第45回科学哲学会ワークショップ準備会

第7回(2013年1月13日)加地大介(埼玉大学)「虹と鏡像一虹は実在するか?」、共同研究『メレオロジーとオントロジー』を振り返る(松田、中山、加藤、長坂、茶谷)

さらに、2010年11月25日に中山の招聘によりSungho Choi Kyung Hee大学(韓国)准教授の講演“Prevalent Maskers”を神戸大学で開催した。

・日本ライプニッツ協会と講演会を共催した。日本ライプニッツ協会第3回大会2011年11月12日(神戸大学)Breger教授“The Whole and its Parts in Leibniz’s philosophy”(司会通訳:松田毅)

日本ライプニッツ協会第4回大会2012年11月3日(東京女子大学)Gregory Brown教授(Huston大学)“Leibniz on the Possibility of a Spatial Vacuum”(司会:松田毅・通訳:

枝村祥平)

[その他]
ホームページ等

http://www.lit.kobe-u.ac.jp/philosophy/kyoukan/matsuda_mow.html

<http://kisoron.hus.osaka-u.ac.jp/nakayama.a.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

松田 毅 (MATSUDA TSUYOSHI)
神戸大学・人文学研究科・教授
研究者番号: 70222304

(2) 研究分担者

中山 康雄 (NAKAYAMA YASUO)
大阪大学・人間科学研究科・教授
研究者番号: 60237477

加藤 雅人 (KATO MASATO)
関西大学・外国語学部・教授
研究者番号: 90185869

長坂 一郎 (NAGASAKA ICHIRO)
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号: 10314501

茶谷 直人 (CYATANI NAOTO)
神戸大学・人文学研究科・准教授
研究者番号: 00379330